

観音物語(5) 噴火口が池になる

け し こうがい い すいらくだい か きょう ねん び かのんりき か きょうへんじょう ち
仮使興害意 推落大火院 念彼観音力 火院変成池たと おこ お お
仮使え害意を興して 大火院に推し落さるも 彼の観音の力を念ずれば 火院変じて池と成らん

ケーキ屋から激しい声が聞こえてくる。店の奥は薄暗くてよく見えないが、どうやら老夫婦の喧嘩のようだ。腰の曲がった二人が修羅場の形相になって睨みあっている。

爺は鼻から熱い息を噴き出し、大きく開いた穴から白い鼻毛が見える。

婆は白髪を掻きむしって、唾を飛ばしながらまくしたてている。

こういうときの女は実によく喋る。男はただ聞くばかりである。女房は理路整然と論戦してくるから、旦那にくやしさがつのる。結婚以前のことまで語り出してくる記憶力のよさに爺は唖然とする。

やがて婆も話の内容が支離滅裂になってゆく。もともと原因がよく分からない、犬も食わぬ夫婦喧嘩であるから、互いに思ったままの言葉が次から次へと、無責任に飛び出してくる。饒舌に自制がきかなくなり、やがて何を言っているのか自分でさえも煙に包まれる。ただ、ただ、荒い息を吐き出すばかりで、興奮を抑えようと、ハア、ハアと、夏の犬のようにあえぐ。あえぎながら次の一手を考えている……。このとき、厭な記憶が蘇ってきた。

「あなたのせいで、息子は家を飛び出してしまったのよ！」

既に 20 年前のことがまた喧嘩の材料になった。いつものネタである。爺の眼がすりあがって、油が注がれた。よく燃える。実によく燃える。怒りがメラメラと立ちあがり、激昂した爺の手があがった。テーブルの食器が一瞬に飛び散る。窮地に追い込まれるといつも「ちゃぶ台返し」である。損害は二千三百円くらいかと、婆は胸算用した。五千円で買った七宝の徳利と盃がテーブルに置いていなくてよかったと、爺は思った。高血圧の爺はおそらく 250 を超えていたであろう。

かつて家を飛び出したときの次男は高校三年の夏休みであった。どうやら夫婦喧嘩の絶えない家庭に嫌気がさしたようである。しかし、家出の原因は他にあって、その真意は未だに不明。

家出の息子は高校卒業ができていない。その息子が八年後に戻ってきた。職場を転々としたけれども、ついに定職に就けずに帰宅する羽目になった。三歳の孫娘と、懐妊している女房を連れて……。

現在、この出奔息子がケーキ屋を継いでいる。そのお蔭で店を閉めずに商売が続けられている。わりと客足が絶えない。その理由は、ときどき息子が「赤鬼ケーキ」「ちゃぶ台ケーキ」「阿修羅ケーキ」「茶髪ケーキ」「ピアスケーキ」など、きわめて斬新なキャラクターケーキを試作して店に並べるからである。

ヒット商品は「紅蓮^{ぐれん}ケーキ」である。このケーキは、「大観音金龍寺たより」の短編小説『紅蓮地獄』がヒントになった。表面が凍った白クリームを割れば、中から蓮の形にカットした紅イチゴが出てくる。「このケーキを食べることによって、心に潜む地獄を砕くことができる」と、ケーキの意味を丁寧に説教してくれることから人気が広がり、これが女の子たちに受けて評判になった。彼は向学心があり、頭は賢く、弁が立つ。週刊誌に、「悪ふざけのケーキ屋さん、け、け、け」という見出しで一面記事になった。これをきっかけにして、テレビ局の取材もあり、店に長蛇の列ができるようになった。

老夫婦の壮絶なバトルは相変わらずである。ボケ封じの喧嘩かもしれない。曲がった腰も伸びる。昼下がりの客が途絶えたところに、店の奥で例のごとく元気な夫婦チャンバラである。二階の息子はそれを子守歌にして鼾をかいて寝ている。

玄関のガラス戸を引く音がした。

「ただいま〜♪」

幼稚園から孫娘が嫁の手に引かれて帰ってきた。

「お、か、え、り〜ィ……」

老夫婦は急に猫なで声になった。バトルは即時停戦である。噴火口のような激しいあの熱い鼻息が、まるで池の水面のように静かになった。大きく開いた鼻の穴も急に小さくなり、元の寸法に縮まった。

「たとえ悪意に満ちて噴火口に突き落とされたとしても、かの観世音菩薩の力を念ずれば、恐ろしく燃えたぎる火口が池に変わって、焼かれることなく無事に救われる」

世尊釈迦牟尼仏は、感情を急に穏やかにしてくれる「孫観音」の妙力を説いた。